平成 28 年度　東京都内湾水生生物調査　9 月成魚調査速報

●実施状況

平成 28 年 9 月 14 日に成魚調査を実施した。調査当日は中潮で、満潮が 16 時 06 分、干潮が 9 時 15 分であった（東京都港湾局のデータ）。調査当日の透明度は 1.2～2.3m であり、全地点とも、赤潮状態は確認されなかった。また、全地点の底層が 1mg/L 以下と貧酸素状態であり、中でも St.25 は無酸素状態であった（水産用水基準では夏季に下層で最低限確保しなければならない酸素量は 4.3mg/L とされている）。

	St.25		St.35		St.22		St.10	
作業時刻	11:10-11:45		10:01-10:40		12:10-12:47		12:59-13:35	
水深（m）	12.8		25.1		13.6		7.0	
天候	曇		曇		曇		曇	
気温（℃）	24.0		24.0		26.2		26.4	
風向/風速(m/sec)	静穏(-/0)		N/1.0		静穏(-/0)		SSE/1.5	
波浪(m)	0.2		0.3		0.2		0.2	
透明度(m)	1.2		1.6		1.5		2.3	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	25.1	22.8	25.0	21.6	25.5	22.3	25.8	23.4
塩分（－）	14.9	32.5	17.3	33.6	20.3	32.8	24.8	31.7
DO(mg/L)	7.3	0.0	7.6	0.7	7.4	0.1	5.6	0.5
DO飽和度(%)	96.2	0.0	102.0	9.0	101.9	1.1	78.7	7.5
pH（－）	7.9	7.8	8.2	8.1	8.3	7.7	8.2	7.8
水の臭気	なし	なし	なし	なし	なし	弱硫化物臭	なし	弱硫化物臭
備考			入網した底泥は、硫化物臭がした。		入網した底泥は、硫化物臭がした。		ホンビノスガイの死殻が大量に採取された。	

観測層：上層（0m）・下層（海底面上 1m）

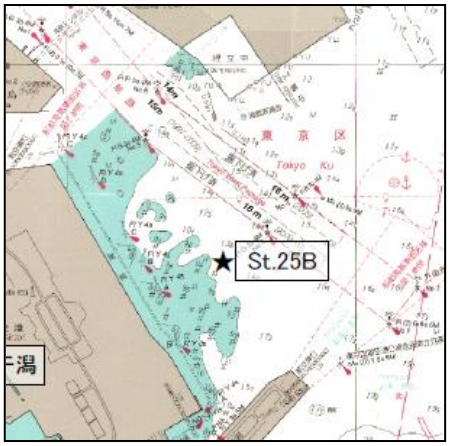
●主な出現種等　（速報のため、種名等は未確定）

主な出現種等	St.25	St.35	St.22	St.10
魚類	なし	なし	カタクチイワシ(r)※	カタクチイワシ(r)※
魚類以外（目立った種）	ホンビノスガイ(+)	なし	ｺｳﾛｴﾝｶﾜﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(r) ムラサキイガイ(r)	ｺｳﾛｴﾝｶﾜﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(+) ホンビノスガイ(+) サルボウガイ(r)
備考	チヨノハナガイ、トリガイ、タイラギ等の死殻が採取された。	死殻のみ（タイラギ、トリガイ、ツキガイモドキ等）	トリガイ、サルボウガイ、ムラサキイガイ等の死殻が採取された。	上記の他、イソギンチャク目、シマメノウフネガイ、アカガイ等が採取された。

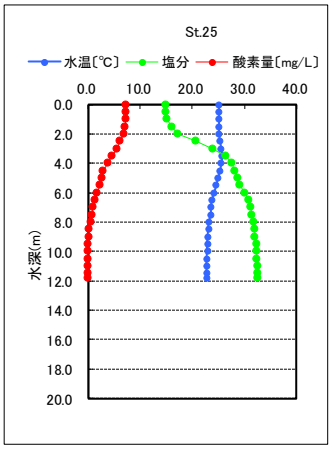
注）表中の（　）内の記号は大まかな個体数を表す。
G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+:5-20 個体未満、r:5 個体未満
※ カタクチイワシは、網の上げ下ろし時に入網したと考えられる。

調査地点：St.25

調査地点位置



水質状況

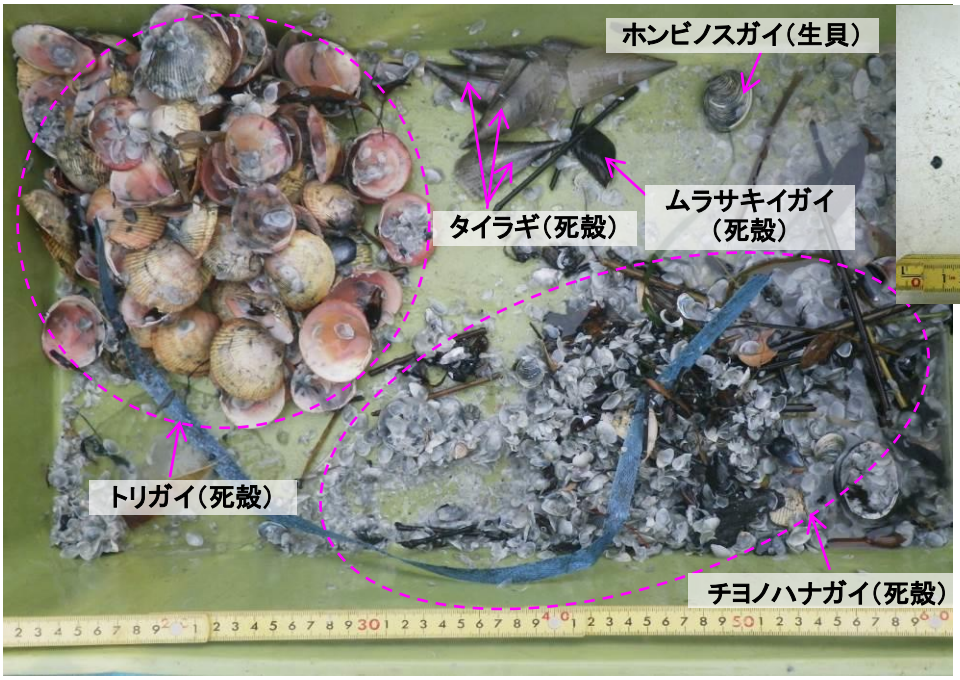


水深 8m 以深はほぼ無酸素状態であった。

地点状況

西側には東京国際空港が見える。

採取試料



ホンビノスガイ（生貝）

主な出現種（死殻含む）

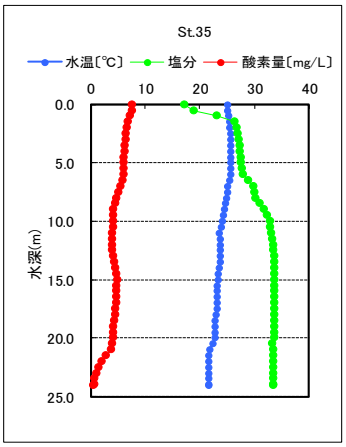
貧酸素状態などの環境悪化に耐性がある。外来種であるが、東京湾ではおなじみの貝となっている。殻の色は本来白っぽいが、底泥中の硫化物の影響で黒っぽくなっている。

チヨノハナガイ、トリガイ、タイラギ等の死殻が採取された。海底付近はほぼ無酸素状態であり、これらの生物が生きることのできない環境になっていたと考えられる。

調査地点：St.35

調査地点位置

水質状況



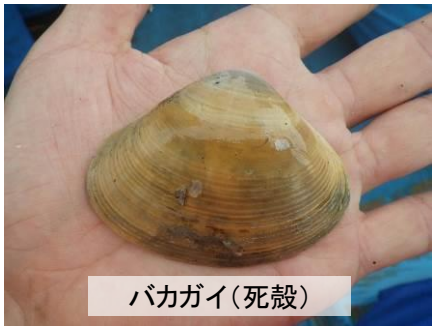
海底付近の溶存酸素量（DO）は 0.7mg/L とほぼ無酸素状態であった。

地点状況

南側には東京湾アクアライン「風の塔」が見える。

採取試料

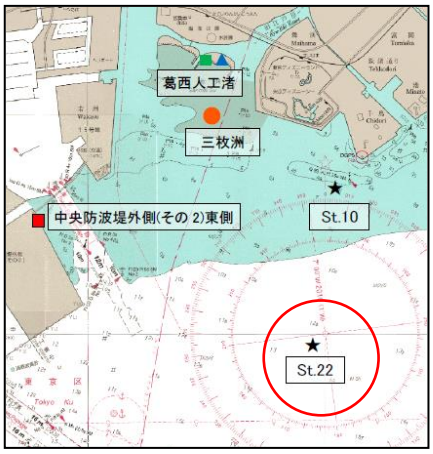
主な出現種（死殻）



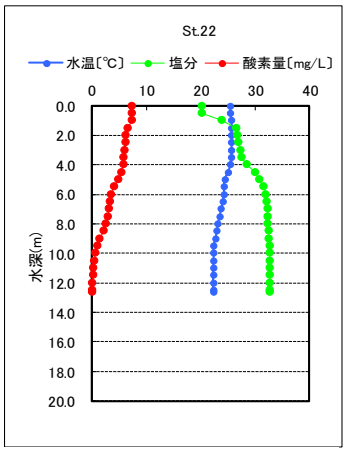
タイラギ、バカガイ、ツキガイモドキ等の死殻が採取されたが、生きている生物は確認されなかった。
海底付近はほぼ無酸素状態であり、これらの生物が生きることができない環境になっていたと考えられる。
湾奥部に生息するタイラギは、貧酸素の影響で概ねこのサイズ（10cm 程度）で死滅する。

調査地点：St.22

調査地点位置



水質状況

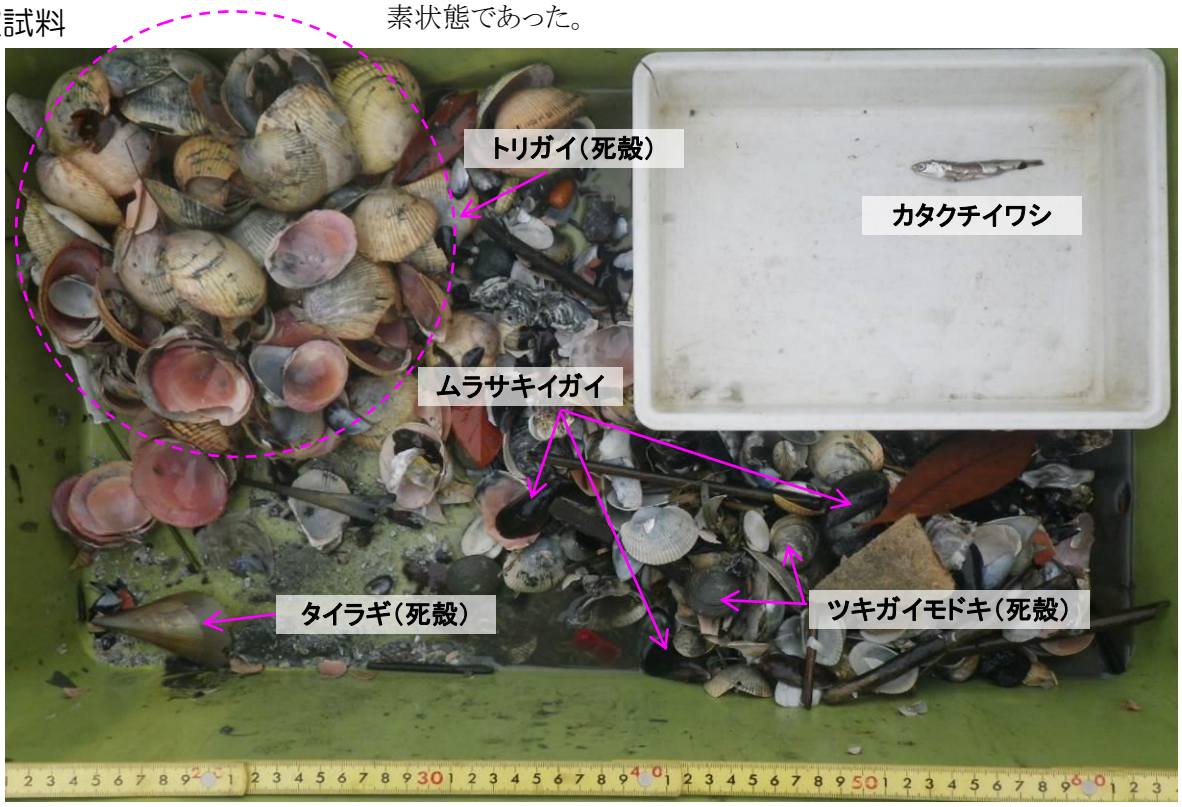


水深 10m 以深はほぼ無酸素状態であった。

地点状況

北西側には東京ゲートブリッジが見える。

採取試料



主な出現種

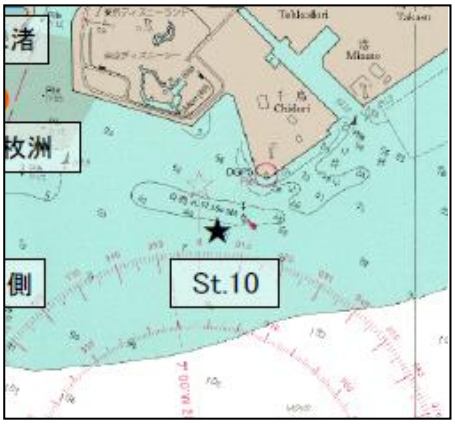
東京湾の表層域では最も個体数の多い魚種であり、大きな群れをなして生活する。下顎が短く、上顎だけにみえることから、片口（かたくち）の名前が付いている。網の上げ下ろし時に入網したと考えられる。

外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。港湾の防波堤等に高密度に付着する。調査地点は砂泥底であるが、礫や貝殻等の基質に着生していたと考えられる。

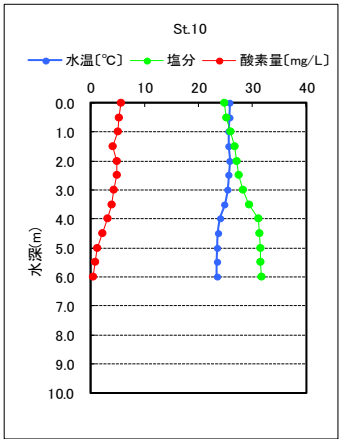
外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。ムラサキイガイよりも淡水の影響の強い水域に多く、転石や護岸に付着する。殻に付着しているフジツボはヨーロッパフジツボ（外来種）である。

調査地点：St.10

調査地点位置



水質状況



海底付近の DO は 0.5mg/L とほぼ無酸素状態であった。

地点状況

北側には、東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料

※カタクチイワシは、網の上げ下ろし時に入網したと考えられる。

主な出現種

ホンビノスガイの死殻が大量に採取され、現地では生貝が 7 個体確認された。ホンビノスガイは貧酸素状態などの環境悪化に耐性があり、一部の個体は夏季の無酸素状態でも生き残っているようである。

内湾奥の干潟から水深約 20m までの砂泥底に生息する。稚貝は、足糸で海藻や基質等に付着して成長し、殻長 12～15mm(発生後 3～6 か月位)で海底生活に移る。
アカガイの代用品として利用される。

殻長 10cm 以上になる大型種。潮下帯から水深約 20m までの砂泥底に生息する。サルボウガイと類似するが、軟体部はサルボウガイよりさらに赤みが強い。
主に刺身用で流通し、市場価値も高い。